

| | |
|-------------|---|
| Title | はじめに |
| Author(s) | 天野, 正輝 |
| Citation | 教育方法の探究 (2001), 4: i-ii |
| Issue Date | 2001-03-15 |
| URL | https://doi.org/10.14989/190250 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

はじめに

1

教育方法学講座の歴史を振り返ってみるに、火曜日の3、4限に設定されている授業（教育方法学演習）は30年を超える歴史をもっている。小生が助手に就任したのは1969（昭和44）年4月であるが、その翌年度にこの授業はスタートしている。3限目が卒論、修論の構想発表と指導に当て、4限目が共同研究というスタイルは現在に至るまで変わらずに続いてきた。木曜2限の授業を基礎ゼミと称し、火曜のそれを本ゼミと呼んで、この二つを講座のカリキュラムの中心に据えてきた。

共同研究では、ほぼ3年単位で中心テーマを設定し、ゼミ、サブゼミでの学習と、報告・討論、まとめという活動を重ねる過程で研究者としての能力を培うことをねらいとしてきた。

スタートした頃の中心テーマは「教育実践に関する諸問題についての総合的研究」であった。具体的課題としては、「教育実践の科学化……教育現実に学ぶ」（1969年度）、「実践的研究方法の系統性」（70年度）、「教育現実の認識ならびに実践の方法」（72年度）であり、教育実践とは何かの問いと教育実践分析の方法論を追求してきた。続いて「教育学を学び研究することにおける実践の位置について」（74年度）を課題とした。この間、芦生グループ、奥丹グループ、障害児グループがフィールドワークを積極的に展開している。小生は、アクション・リサーチとして、市内の高等学校の授業（主として英語の授業）に参加した。76年度からは「教育における認識の問題」を中心テーマにして、①教育的認識の問題、②子どもの認識発達のプロセス、③教育の過程と認識の発達、④生活指導の諸問題という4本の柱を立て、各柱ごとにサブゼミを組んで研究を進めた。

70年代の末から80年代にかけては、京都府下における到達度評価実践の広がりを受けとめて、学力と評価の問題を中心課題としている。「学力と人格形成－発達論的見地より」（81年度）、「教育評価の歴史・現状・課題」（82年度）というテーマが設定され、81年度からほぼ3年単位の共同研究を定着させている。

教育方法学のゼミでは、例年、オリエンテーションを念入りに実施し、ゼミの性格と歴史、前

年度の経過と総括、本年度の研究課題、基礎文献の選定、前期予定と運営について等を議論し、確認しあっている。このような共同研究の過程で、院生は、研究者としての知識、技術、問題意識、感性、態度等の基礎的トレーニングを積んできたのである。共同研究は個人研究の単なる寄せ集めに終わることなく、研究過程での共同性を、各人の個性（個人がかゝる研究の独自性）を生かしつつ、強めることを追求してきたのである。

2

火曜日のゼミの展開過程で、小生が主として関心をもち、かかわってきたのは、教育方法の歴史的研究という側面であった。授業論にせよ学力論、評価論にせよ、その歴史的考察の必要性を説き、かつ多くの発言と研究発表をしてきた。過去と現在と未来をつなげてとらえる力量の育成をめざしてきたつもりである。小生がいつから、そしてなぜ歴史的研究という方法に興味をもつようになってきたのかは自分でもわからない。しかし、先行研究にも出て来ない史料を見つけ、誰も知らない新しい教育の事実を発見したり、仮説を証明出来た時の、快感にも似たあの喜びは何物にも換え難い。

いかなる教育現象にも、思想性と歴史性が含まれている。人は教育の歴史的事象に対するに、それを克服の対象とみるか、継続発展さすべき対象とみるかのいずれかの態度をとる。その態度のとり方のちがいは、研究者を支えている価値意識である。そしてどのような価値観を持つかが、どのような未来を選択するかに大いに関係してくるのである。過去を正しく知ることの出来ないものは未来を展望できない。

自分の問題意識を明確にし、方法を選択し、視点を定めてねばり強く史料をさがす。史料探しには時間と費用がかかる。可能な限りの史料を収集し、課題の視点から取捨選択し、解釈し、関連づけ、意味づけして過去の教育の一断面をよみがえらせる。歴史研究によって、今日私たちが直面する教育課題を、よりクリアにし、その克服の方策あるいは契機を見い出すことが出来る。近年の学生諸君には、教育の諸問題を歴史的に考察し、それを現代に生かしてとらえる力と関心が稀薄であるように思われる。

過去と現在と未来をつなげてとらえていく力量こそ、われわれに、いま、最も強く要請されているのではなかろうか。

2001年3月 天野正輝